



香

川

漆

芸

漆と漆器

うるし（漆）とは、漆の木から採取した樹液です。

塗料や接着剤、防水剤として利用したのが始まりです。

塗膜が堅牢で熱や湿度に強く、酸やアルカリにも変化しないという特徴があります。

漆

漆の木は、日本をはじめ、朝鮮、中国、台湾などの東アジアや、タイ、ミャンマー、ベトナムなどの東南アジアに自生しています。漆の木の幹を傷つけると、その傷口を埋めようとして乳白色の樹液が出ます。この樹液を掻き集めて精製したのが漆です。漆は、樹齢 10 年以上の漆の木から掻き取られますが、1 本の木から 1 年間で 200g 程度しか採取できません。

漆は、塗料や接着剤、防水剤として利用したのが始まりです。塗膜が堅牢で熱や湿度に強く、酸やアルカリにも変化しないという特徴があります。

採取した漆から木屑等を取り除いた生漆（きうるし）を攪拌して成分を均質にする「なやし」、加熱して水分を蒸発させる「くろめ」の作業を行うと、半透明の飴色で粘度のある精製漆になります。精製漆に鉄粉を加えると黒漆、顔料を加えて色をつけると色漆になります。

漆の乾燥

液状の漆を固化させることを「漆を乾かす」といいますが、漆の乾燥は、水分が蒸発するのではなく、漆液中に含まれる酵素の酸化作用によって固化するものです。このため、漆の乾燥には適度な温度（25℃前後）と湿度（75% 前後）が必要で、梅雨の高温多湿な時季ほど早く乾燥します。漆風呂は、檜や杉の板を貼って防塵、保温、保湿の効果を高める密閉構造になっており、漆の乾燥に最適な温度・湿度が保たれるようになっています。

漆器

漆は堅牢性に加えて独特の質感や光沢を備えており、その特有の美しさが古くから日本人の美意識に合致し、多くの漆器が生み出されてきました。漆器は、素地を作る素地工程、素地を整える下地工程、下地に漆を塗り重ねる塗り工程、漆面に文様をつける加飾工程という長く手間をかけた工程を経て完成します。

素地

漆器の素地を器胎ともいいます。

漆器は器胎の素材によってさまざまな呼ばれ方をし、木を素地にしたものは木胎、竹は籃胎、布は乾漆、紙は紙胎、皮は漆皮、金属は金胎、陶器は陶胎などと呼ばれます。

籃胎は、表皮を取り除いた無節部分の竹ひごを蓋と身の木型に沿って網代に編んで素地をつくる漆器で、漆を塗る際に編み目を塗りつぶした上に加飾を施す方法は、香川独自の素地制作の技法です。

また、麻布を漆で貼り重ねて作る技法（乾漆）もあります。

漆器とは、木・竹・紙などの素地に漆を塗料・接着剤・防水剤として用いて製作する東洋独特の工芸品です。

漆器は、器胎を成形する素地工程、素地を整える下地工程、下地に漆を塗り重ねる塗り工程、漆面に色漆や金粉などで文様をつける加飾工程を経て完成します。

加飾

加飾にはさまざまな技法があり、漆で描いた文様が乾かないうちに金粉などを蒔いて装飾する蒔絵、平板に加工した貝殻を文様の形に切って漆面に貼る螺鈿などが代表的なものです。香川には、蒔醬、存清、彫漆という香川独自の技法があります。

香川の三技法

→ 詳しい説明は、9 ページ

彫りと色漆による加飾に特徴があります。



蒔醬（きんま） 竹や木などで作った素地の上に漆を塗り重ねて、剣で文様を彫り、彫った溝に色漆を埋め、最後に平に研いで意図する文様を表します。



存清（ぞんせい） 漆を塗り重ねた器物の表面に色漆で文様を描き、輪郭や細部に剣で線彫りを施し、金粉などを埋めて文様を引き立てます。色漆を埋め込む技法もあります。



彫漆（ちようしつ） 色漆を数十回以上塗り重ねて（100 回で約 3mm）いくつもの色漆の層を作り、その層を彫り下げることで文様を浮き彫りにします。

漆器の産地

江戸時代に藩の産業奨励策によって各地に特色ある漆工芸が発達し、これが今日の漆器の産地につながっています。

伝統的工芸品に指定されている漆器



11月13日は「うるしの日」

平安時代前期、惟喬（これたか）親王が、京都嵐山法輪寺に参籠し、満願の日に虚空蔵菩薩から漆の製法と漆塗りの技法を伝授されたと伝わる 11 月 13 日は「うるしの日」とされています。

漆の木



色漆を作る



漆風呂



玉楕象谷「彩色蒔醬料紙硯匣」



籃胎 網代と竹ひご

漆芸の歴史



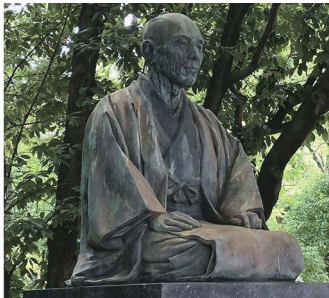
是川石器時代遺跡木胎漆器出土状況
出典：JOMON ARCHIVES(八戸市教育委員会撮影)



玉虫厨子宮殿部正面扉(神将図)



八橋蒔絵螺鈿硯箱 尾形光琳作



玉椿象谷像 高松市立中央公園
1958(昭和33)年、玉椿象谷先生顕彰委員会が彫刻家新田藤太郎(にったとうたろう)に依頼して制作した銅像です。台座の題字「玉椿象谷先生」は、磯井如眞先生の揮毫によるものです。

日本人と漆の関わりは縄文時代にさかのぼります。時代とともに技術も発展し、明治時代には日本の代表的な輸出品となるなど、漆器・漆芸品は日本を代表する伝統文化のひとつに数えられています。

日本の漆芸

日本の漆の歴史は9000年前に遡り、縄文時代の遺跡から漆を塗った容器が出土しています。飛鳥時代に大陸から仏教とともに漆工芸技術が伝えられると、日本の漆芸技術は大きな発展を遂げました。奈良時代の正倉院には優れた漆工品が保存され、東大寺や興福寺には、麻布を漆で塗り固める乾漆技法で制作された仏像が安置されました。平安時代には、蒔絵や螺鈿の技法が日本人の好みに合うように改良され、貴族の調度品のほか、平等院鳳凰堂や中尊寺金色堂などの建物内部が漆で仕上げられました。

鎌倉時代から室町時代にかけて、武士の間に蒔絵や螺鈿で装飾された漆塗りの調度品が流行する一方、室町時代には中国から唐物とよばれる新しい漆器が輸入されてもてはやされました。

安土桃山時代に入ると、南蛮漆器と呼ばれる漆塗の調度品が西欧に紹介されました。また、茶の湯の儀礼が定められて茶道が流行するなかで、茶人の間に漆塗りの茶器が愛用されました。江戸時代には、幕府や大名家に仕えた漆工家により、精巧で豪華な蒔絵の調度類が制作される一方、各藩の産業奨励によって漆器の産地が形成され、庶民の間にも生活漆器が普及していきました。このほか、長崎貿易を通じて、蒔絵や螺鈿の豪華な調度品が輸出されて西欧の王侯貴族に愛用されました。

明治時代に入り、ヨーロッパで日本の漆器が好評を博すると、政府の殖産興業政策による工芸品の輸出奨励策もあって、各地の特色ある漆器が産業として発展していきました。また、西欧の美術思潮の影響を受け、美術工芸としての漆器作品の制作も始まりました。

戦後まもなくの1950(昭和25)年には文化財保護法が制定され、伝統工芸技術の保護や重要無形文化財の制度が整えられました。また、1974(昭和49)年には「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が制定され、各地の特色ある漆器が伝統的工芸品に指定されて漆器産業の振興が図られています。

香川の漆芸

香川の漆芸は江戸時代後期に現れた一人の天才漆工に始まります。それまでにない独自の技法で、またたく間に香川は漆芸王国とも呼ばれるようになりました。

<はじまりは象谷>

香川県に漆芸が根付いたのは、江戸時代後期、高松藩に出た一人の天才漆工・玉椿象谷(たまきじぞうこく)の功績によるものです。1806(文化3)年、刀剣の鞘塗師の家に生まれた象谷は、家業を継いで塗りと彫りの技を身につけた後、当時の主流であった蒔絵に代わる新しい漆工芸技法として、中国伝来の存清・彫漆技法、中国南方・東南アジア伝来といわれる藍胎・蒔醬の技法の習得に努めました。帰郷後は藩主の庇護を受けて藩の宝物の保存修理に当たるかたわら、彫りと色漆

玉椿象谷により創始された香川漆芸は、豊かな自然や歴史、多彩な文化の伝統を背景として、歴代の名工・名匠たちによって継承、発展を遂げながら、現代に引き継がれています。漆文化を未来に受け継ぐ新しい取り組みも行われています。

をもとに、それまでにない独自の漆工芸を確立して多くの漆芸品を制作しました。今日、象谷の始めた蒔醬、存清、彫漆の技法は「香川の三技法」、象谷は「香川漆芸の祖」といわれています。

<その発展>

玉椿象谷は、1869(明治2)年に亡くなりましたが、象谷が始めた漆工芸は、一門が受け継いで各種漆器の製造を手がけました。また、政府の殖産興業政策を受け、1898(明治31)年に香川県工芸学校(現・香川県立高松工芸高等学校)が開校し、本格的な技術者養成の取組みも始まりました。香川漆器への評価が次第に高まるなかで、高松市を中心に漆器産業が根付く一方、電気ろくろの普及による木製素地の量産化を受け、木彫を色漆で仕上げる讃岐彫も多く生産されるようになりました。当時、高松市に店をかまえた百花園は、漆器に限らず讃岐彫を広く手がけたので、石井磐堂(いしいけいどう)、高橋皖山(たかはしかんざん)など、玉椿象谷の技法を受け継いだ彫りの名工が活躍し、彫漆にも優品を遺しています。これらにより香川は漆芸王国とも呼ばれるようになります。

大正時代から昭和初期にかけて、中央での動きにあわせて、美術工芸としての香川漆芸を確立する努力も試みられました。その中心にいたのが磯井如眞(いそいじょしん)で、玉椿象谷の作品研究を通じて、様々な加飾技法を身につけるとともに、奥行きと立体感のある絵画的表現を可能にした点彫り蒔醬の技法を考案しました。また、同時期に活躍した音丸耕堂(おとまるこうどう)は、豊富な色漆を多用して詩情豊かな彫漆作品を発表しました。磯井如眞は、音丸耕堂らとともに工会(くみかい)という研究会を結成して研鑽に励み、香川漆芸の水準の向上に努めました。

<人間国宝>

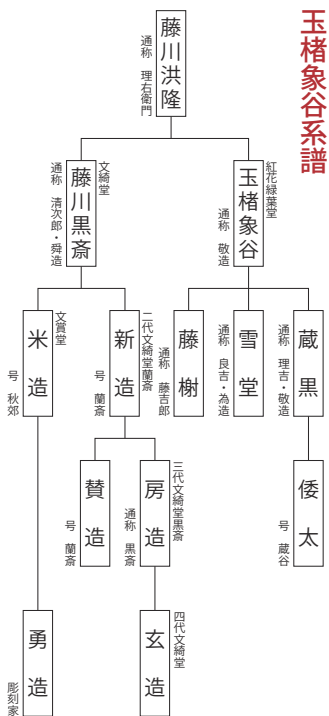
戦後、文化財保護法の設立を受け、助成の措置を講ずべき無形文化財として蒔醬と存清が選定され、蒔醬で磯井如眞、存清で香川宗石(かがわそうせき)が技術保持者に認定されました。続いて、1955(昭和30)年、彫漆で音丸耕堂、翌年に蒔醬で磯井如眞が重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました。香川宗石は、数少ない存清の優れた技術保持者として、香川県指定無形文化財保持者に指定されました。また、香川の漆芸技法を伝承する施設として、1954(昭和29)年に香川県漆芸研究所が設立されました。その後、磯井正美と太田儔(おおたひとし)が、ともに蒔醬の豊かな色彩表現と多彩な表現領域を確立したことにより、重要無形文化財保持者に認定されます。一方、明石朴景(あかしぼつけい)や大西忠夫は、漆仕上げの屏風やパネルなどに見るように、室内装飾に新境地を開拓し、香川漆芸の表現領域を広げていきました。

<その他の技法>

香川漆器の技法には、三技法のほかに、後藤塗(ごとうぬり)と象谷塗(ぞうこくぬり)があります。後藤塗は、高松藩士であった後藤太平が始めたもので、彫抜盆などの器物に朱漆を塗り、表面を手で撫で付けながら凹凸を出し、独特の文様を表現するものです。象谷塗は、茶托や丸盆の素地にらせん状の彫りを入れ、漆を数回塗り重ね、彫り面に真菰(まこも)という植物の粉末を撒いたものです。

以上を「香川漆器の五技法」といい、この五技法によって製造された漆器は、国の伝統的工芸品の指定を受けています。また、長年、香川漆器の生産に携わり、「五技法」に優れた技を有している技術者が伝統工芸士に認定され、技術の保護が図られています。

このほか、香川漆器には、木の素地に文様を薄肉に彫って色漆を埋める讃岐彫(さぬきぼり)、同心円上に彫り込んだ溝に色漆を違えながら埋めて独楽のように仕上げる独楽塗(こまぬり)の技法があります。

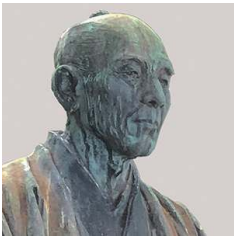


玉椿象谷系譜

後藤塗

象谷塗

江戸時代



玉椿象谷
1806～1869

香川漆器の基礎を築いた。



いっかくいんろう

一角印籠＜重要美術品＞

1839 年 香川県立ミュージアム蔵 撮影：高橋章

一角印籠は、漆の作品ではありませんが、8cm余の一角獣の牙に 1,086 点の動植物を彫り込んでおり、象谷の彫りの技術の高さを証明しています。
縦 2.9cm、横 5.5cm、高 8.6cm



さいしききん まりようしすずりばこ

彩色蒔醬料紙硯匣 ＜重要美術品＞

1854 年 香川県立ミュージアム蔵 撮影：高橋章

料紙箱の中に料紙と硯箱が納まるようになっており、料紙箱と硯箱でひと揃えになっています。竹ひごを籠状に編み木枠に固定して素地をつくり、黒漆を塗り重ねた上に色漆を用いた蒔醬の技法で仕上げ、側面に漢詩を刻んでいます。料紙箱：縦 40.0cm、横 31.1cm、高 11.1cm
硯箱：縦 26.5cm、横 20.5cm、高 6.2cm

1806 玉椿象谷、鞘塗師藤川理右衛門の子として高松に生まれる
象谷、父のもとで修行を積み、漆塗りと彫りの技術習得

1826ごろ 象谷、存清、彫漆、藍胎蒔醬の技法習得
1826ごろ 象谷、高松に帰郷、一角印籠、堆黒松ヶ浦香合、堆朱鼓箱、彩色蒔醬料紙硯箱をはじめ、三百余の漆工品制作



ついでしゅ にじゅうぼりつづみばこ

堆朱二重彫鼓箱 ＜重要美術品＞

1853 年 高松松平家資料(香川県立ミュージアム保管)撮影：高橋章
朱漆を塗り重ねて蓋表中央に高松藩の葵の紋を置き、その周囲と側面に牡丹と菊を上下二重に彫り、蝶を配しています。堆朱の技法で仕上げています。
縦 28.8cm、横 46.0cm、高 24.0cm



ついでく まつ がうらどうごう

堆黒松ヶ浦香合 ＜重要美術品＞

1851 年 香川県立ミュージアム蔵 撮影：高橋章

朱漆を数十回塗り、その上に黒漆を塗り重ねて朱漆まで彫り下げ、貝殻と「松山の松の浦風吹きよせば拾ひてしのべ恋わすれ貝」(『後拾遺和歌集』)という讃岐ゆかりの古歌を彫り出しています。堆黒の技法で仕上げられています。
径 8.6cm ・高 2.4cm、径 8.6cm ・高 2.5cm
径 8.7cm ・高 2.4cm

明治時代

1869 玉椿象谷没
象谷の子の玉椿蔵黒、雪堂、藤樹、蔵黒の子の蔵谷のほか、象谷の弟の藤川黒斎(文綺堂)、
黒斎の子の新造(蘭斎)と米造(秋郊、文賞堂)、象谷の始めた漆芸を受

藤川黒斎

1808～1885



かちょうぞんせい まるばん

花鳥存清丸盆

明治時代 香川県漆芸研究所蔵 撮影：高橋章

玉椿象谷の弟である黒斎(くくさい)の作品です。黒漆の地に朱・黄・緑・褐色の色漆で尾長鳥と椿、くちなし、菊を描き、線彫りによって輪郭や葉脈を際立たせています。立ち上がり部には素彫りで唐草文を描いています。
径 55.8cm、高 4.7cm

玉椿蔵谷

1878～1912



ついでく こうごう おもだかに の ず

堆黒香合沢瀉蟹之図

明治時代 香川県立ミュージアム蔵 撮影：高橋章

玉椿象谷の孫に当たる蔵谷(そうこく)の作品です。黒漆を塗り重ねた堆黒の香合で、朱の青海波の地文に沢瀉と蟹を彫り込んでいます。
径 8.5cm、高 2.6cm

け継ぎ、各種の漆器製造

1898 香川県工芸学校開校

1907ごろ 高松市に百花園開店

藤川蘭斎

1840～1915



ついでく せんごう

堆黒饅盒

明治時代 香川県立ミュージアム蔵 撮影：高橋章

藤川黒斎の次男である蘭斎(らんさい)の作品です。蓋の中央部は竹を編んだ藍胎、縁は薄板を巻いた曲輪の素地に黒漆を塗って文様を彫り出す堆黒の技法によっています。側面には唐草文、蓋全面には咲き誇る菊花を彫り込んでいます。
径 21.8cm、高 11.7cm

石井馨堂

1877～1944



ついでしゅ きく きりほうおう もんりょうし ぶん こ

堆朱菊桐鳳凰文料紙文庫

1926 年 香川県立ミュージアム蔵 撮影：高橋章

石井馨堂(いしいけいどう)は、明治末期に高松市に開店した百花園の職長として讃岐彫の作品を数多く手掛けました。朱漆を塗り重ねた蓋表には青海波(せいがいば)の地文に梧桐(ごとう)と鳳凰を彫り込み、側面には菊を背景にトンボ、蝶、バッタ等の昆虫を彫り出しています。
縦 40.9cm、横 32.3cm、高 12.7cm

大正時代・昭和時代前期

1913ごろ 磯井如眞、点彫り蒔醬の技法創案、
音丸耕堂、各種の彫漆作品制作

1933ごろ 磯井如眞、音丸耕堂らとともに工会結成

1952 文化財保護法に基づき、助成の措置を講ずべき無形文化財として蒔醬

と存清選定

1954 香川県漆芸研究所開所

1955 音丸耕堂、重要無形文化財彫漆保持者に認定

1956 磯井如眞、重要無形文化財蒔醬保持者に認定



磯井如眞

1883～1964

重要無形文化財蒔醬保持者



ちようしつ きんま そうかもんつづみばこ

彫漆蒔醬草花文鼓箱

1931 年 香川県立ミュージアム蔵 撮影：高橋章

磯井如眞(いそいじょしん)は、大正から昭和の時期にかけて活動し、香川漆芸の水準の向上に努めました。この作品は、玉椿象谷の堆朱鼓箱を意識して制作したものです。黒漆を塗り重ね、各面には意匠化した草花文を、面取り部分には幾何学文を彫り出しています。葉脈や花弁には金の点彫り蒔醬を施しています。
縦 30.0cm、横 45.0cm、高 27.0cm



きんま じきろう ゆうきん の ず

蒔醬喰籠遊禽之図

1958 年 香川県漆芸研究所蔵 撮影：高橋章

甲を丸くつた器胎は、積み木状に積み重ねた素地を内側から削り出し、底部には竹網代をはめ込んで固定しています。蓋には飛翔する鳳凰を器胎全面には草花文を、黒地に朱の線彫り蒔醬で配置。その輪郭線を丸剣彫りで、細部は角剣を用いて使い分けています。
径 12.5cm、高 13.6cm



音丸耕堂

1898～1997

重要無形文化財彫漆保持者



ちようしつ しきしばこ こんちゆうふ

彫漆色紙宮昆虫譜

1938 年 香川県漆芸研究所蔵 撮影：高橋章

音丸耕堂(おとまるこうどう)は、石井馨堂に師事して彫りの技術を磨きました。この作品は、面取り、隅切りをした被せ蓋造りの色紙箱で、色漆を塗り重ねて文様を彫り表す彫漆技法により様々な草花や昆虫を表現しています。元来、漆の色彩は、天然顔料による朱、黒、黄、緑、褐色に限定されていましたが、耕堂は、いち早く新材料のレーキ顔料を取り入れ、かつてないほど豊富な色彩表現の領域を広げ、画期的な漆の色彩の革命をもたらしました。これはその出発点となった記念碑的作品です。
縦 31.0cm、横 27.5cm、高 6.0cm



ちようしつ あじさい こうごう

彫漆紫陽花香合

1950 年ごろ 香川県漆芸研究所蔵

紫陽花の 4 枚の花びらをひとまとめにして、蓋の中心から周囲に次第に大きく彫り込んでいます。色漆を塗り重ねて彫り下げ、色漆の鮮やかな対比により、咲き誇る紫陽花の華やかさを際立たせています。
径 7.4cm、高 5.0cm

昭和時代後期

- 1962 香川宗石、存清の香川県指定無形文化財保持者に指定
明石朴景や大西忠夫、漆芸の新しい表現領域開拓
- 1976 香川漆器、国の伝統的工芸品（経済産業大臣指定）に認定



香川宗石
1891～1976
香川県指定無形文化財保持者



かちょうもん ぞんせい てばこ
花蝶文存清手箱
1969 年 香川県漆芸研究所蔵

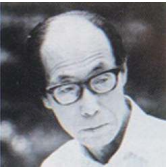
香川宗石(かがわそうせき)は、三技法の中でも特に存清の技法を得意とし、多くの優れた存清作品を発表しました。この作品では、蓋表の中央から側面にかけて向かい合った花蝶文を描き、周囲を草花文で埋めています。ぼかしの表現による複雑な色調と線彫り部分に埋めた金粉が装飾効果を高め、さらに蓋の裾を広げることで、黒地の器を格調高く表現しています。
縦 31.5cm、横 22.5cm、高 15cm



ざぬ き ぞんせいこう ぼん
讃岐存清香盆
制作年不明 香川県漆芸研究所蔵 撮影：高橋章

見込み中央に龍の図を存清で描いた飾り盆。龍は、よく雲を起こし、雨を呼ぶと言われます。龍の背後に瑞雲を配し、龍の姿態に合わせた形の飾り枠で囲んでいます。文様部分は極彩色の色漆で盛り上げ、立体感を強調しています。
径 36.0 cm、高 3.5cm

- 1985 磯井正美、重要無形文化財蒔醤保持者に認定



明石朴景
1911～1992



かんしつかがざりつぼ くんぶう えんぜん
乾漆飾壺「薫風婉然」
1987 年 香川県立ミュージアム蔵 撮影：高橋章

明石朴景(あかしぼつけい)は、伝統の漆芸技法を用いながら新しい造形感覚の作品を制作しました。この作品はにんにくをモチーフにした乾漆の素地に菖蒲を加飾し、背景は菖蒲の葉を図案化しています。
長径 42.8cm、短径 40.3cm、高 43.5cm



大西忠夫
1918～2007



うるしがく
漆額「バラ」
制作年不明 香川県漆芸研究所蔵

大西忠夫(おおにしただお)は、日展、日本新工芸、日工会を中心に活躍した現代工芸作家で、建築物を飾る漆のパネルや屏風の制作を通じて、漆芸の新分野を開拓しました。
縦 152cm、横 121.5cm

平成時代

- 1994 太田 儔、重要無形文化財蒔醤保持者に認定
- 2009 香川県漆芸研究所、香川県文化会館に移転
- 2013 山下義人、重要無形文化財蒔醤保持者に認定



磯井正美
1926～2023
重要無形文化財蒔醤保持者
紫綬褒章受章
香川県文化功労者
勲四等旭日小綬章受章



かんしつ きん ま なみもん もり き
乾漆蒔醤波文盛器
1958 年 香川県漆芸研究所蔵

磯井正美(いそまさみ)は、磯井如眞の三男で、点を横に重ねて線とし、線を横に重ねて面とする往復彫りの技法をはじめ、独自の表現技法を創案して蒔醤の表現領域を広げました。この作品は、金網で作った素地に漆を塗り重ねて貝の形にしています。そして、波文を線彫りと点彫りの蒔醤の技法で帯状に表現しています。
縦 39cm、横 50cm、高 11cm



きん ま ば がんせきりょうこうし
蒔醤蒲甘寂寥合子
1993 年 香川県立ミュージアム蔵 撮影：高橋章

1990(平成 2) 年、蒔醤の源流であるミャンマー西部の古都パガンを訪問した取材をもとに制作した作品です。蓋表には闇夜に浮かぶ月を白蝶貝で表現し、側面には月明かりに浮かぶパゴダをシルエット状に映し出しています。悠久の時間を刻むなかで時空が止まったように受けた印象を、寂寥感を重ね合わせて表現しています。
径 23.8cm、高 15.0cm



太田儔
1931～2019
重要無形文化財蒔醤保持者
紫綬褒章受章
香川県文化功労者
勲四等旭日小綬章受章



らんたいきん ま はつかく じきろうそう かもん
籃胎蒔醤八角食籠草花文
1980 年 香川県漆芸研究所蔵

太田儔(おおたひとし)は、磯井如眞に師事し、蒔醤の豊かな色彩表現法を創案しました。この作品は、太田儔によって復活した、竹ひごを編んで素地とする籃胎の技法で制作しています。漆を塗り重ねた食籠の表面に、蒔醤の技法で芥子、牡丹、蘭等の花を伸びやかに表現。背景の地文は、糸菊を図案化した連続文様となっています。
縦 25.6cm、横 25.6cm、高 8cm



らんたいきん ま ちゃぼこ はるかぜ
籃胎蒔醤茶箱「春風」
1998 年 香川県立ミュージアム蔵 撮影：高橋章

二重に竹を編んだ籃胎の素地に漆で塗り固め、草花文を背景に、藪椿とめじろを蒔醤の技法で仕上げています。太田儔により考案された、縦・横・斜めと細かな直線を引き、色漆を埋めて陰影や立体感を表現する布目彫り蒔醤の技法と伝統の線彫りを組み合わせています。柔らかな光のもとで春風が心地よい、のどかな陽春のひとときを表現しています。
縦 14.6cm、横 22.4cm、高 15.7cm

令和時代

- 2020 大谷早人、重要無形文化財蒔醤保持者に認定



山下義人
1951～
重要無形文化財蒔醤保持者
紫綬褒章受章
香川県文化功労者
旭日小綬章受章



きん ま まき え ぼん おちつばき
蒔醤蒔絵盆「落椿」
1989 年 香川県漆芸研究所蔵

山下義人(やましたよしと)は、香川県漆芸研究所修了後、磯井正美(蒔醤)、田口善国(蒔絵)に師事。この作品は、椿の花が姿を保ったまま水面へと落ち浮かんでいる様を表現しています。水面を模した背景は、丸刀彫り蒔醤をほどこし、色を埋める際に仕掛けを作ることで模様の変化をつけたもの。主題となる椿の花は、蒔朱蒔絵によって色鮮やかに描かれ、盆の緑の白い線が僅かに残った波紋を表しています。
径 32.5cm、高 3.5cm



きん ま しきし ばこ はる
蒔醤色紙箱「遙か」
1989 年 香川県立ミュージアム蔵

「白漆に銀粉を入れて上塗りし、蒔醤の手法で風紋を白から黒に25回の色埋めによって変化させ、一部に淡い黄褐色を配してモノクロの世界に彩りを添え、品よくまとめている。砂漠を旅する人がいる。余りの苦しさには引き帰そうか、進もうか、葛藤の末「遙か」彼方に何かある。希望とロマンを求めて歩く。進むしかない旅を続ける作者の心境であろうか?内容のある優れた作品である」第 36 回日本伝統工芸展(平成元年)朝日新聞社賞受賞総評
縦 27cm、横 30cm、高 6cm



大谷早人
1954～
重要無形文化財蒔醤保持者
紫綬褒章受章
香川県文化功労者
旭日小綬章受章



らんたい きんま あじろ あみかがざりばこ
籃胎蒔醤網代編飾箱
1994 年 香川県立ミュージアム蔵

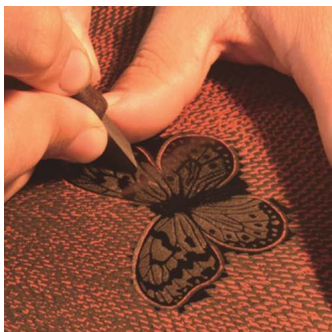
大谷早人(おおたははやと)は、高松工芸高校漆芸科卒業後、太田儔に師事。この作品は、作者の生まれ育った瀬戸の海を主題としています。グラデーションで構成した波、布目彫り蒔醤を用いた魚、その上に黒の波紋を被せることで透明度のある深い海とリズム感が表現されています。素地は二重の籃胎で、内側は菊底編、外側面は、竹ひご1本1本を色漆で微妙に塗り分けた後、編みつけたものです。第 12 回日本伝統工芸展文化庁長官賞受賞
縦 21cm、横 27.5cm、高 8cm



らんたいきん ま か しき かわせ
籃胎蒔醤菓子器「川瀬」
2009 年 香川県漆芸研究所蔵

器胎は、十二角に形成した籃胎二重編み。散歩する川の川面の神トンボの優雅な飛び方をデザインしています。背景に広がる川の流れは、布目彫り蒔醤を数回重ね、その上に小石を配置。通常は直角に彫り重ねますが、約 40 度の角度で交差させることでより波のイメージに近づけています。内側は籠組みに呂色仕上げで、編み目が透けて見えます。
径 25.5cm、高 5cm

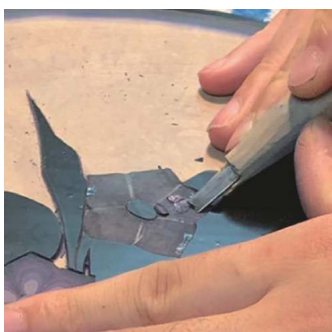
香川の 三技法



【代表的な作家】
玉楮 象谷
磯井 如眞、磯井 正美、太田 儔
山下 義人、大谷 早人



【代表的な作家】
玉楮 象谷
藤川 黒斎、香川 宗石、明石 朴景



【代表的な作家】
玉楮 象谷
藤川 蘭斎、玉楮 蔵谷、石井 磐堂
音丸 耕堂、大西 忠夫

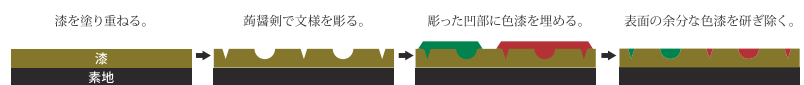
香川の漆芸は、玉楮象谷によって創始されました。

彫刻刀や剣による彫りと色漆による加飾が香川漆芸の特徴であり、蒔醬、存清、彫漆を「香川の三技法」といいます。また、竹ひごを籠状に編んで素地とする籃胎にも香川独自の技法があります。

蒔醬（きんま）

竹や木などで作った素地の上に漆を十数回塗り重ね、蒔醬剣（きんまけん）で文様を彫ります。そして、彫り込みを入れた溝に色漆を埋め、表面を平らに研ぐことによって、意図する文様を表現する技法です。中国の南方（四川・雲南地方）からタイやミャンマーに伝わり、さらに、室町時代末期ごろ、日本に伝わりました。

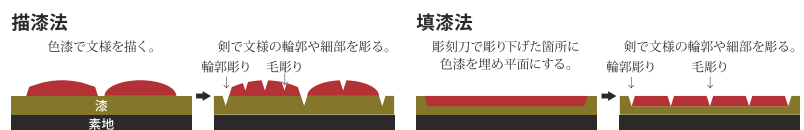
蒔醬は、彫り・色埋め・研ぎの工程から生み出される細密な表現が特徴的です。近年では、従来の線彫りに加えて「点彫り」や「往復彫り」「布目彫り」などの技法も生まれ、より多彩な表現が可能となりました。



存清（ぞんせい）

漆を塗り重ねた器物の表面に色漆で文様を描き、剣で輪郭や細部に線彫りを施し、彫り口に金粉や金箔を埋めて文様を引き立てます。これを描漆法（びようしつほう）といい、玉楮象谷はこの技法で存清の作品を制作しています。存清にはもう一つの技法があり、漆を塗り重ねた器物の表面に彫刻刀で文様を彫り、その彫り口に色漆を埋め研ぎ出した後、剣で彫り引き立てます。これを填漆法（てんしつほう）といいます。

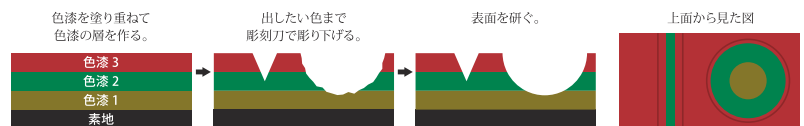
室町時代に中国から日本に伝わり「存星」とも書きますが、香川県では玉楮象谷が用いた「存清」の文字を用いています。



彫漆（ちょうしつ）

彫漆は、各種の色漆を数十回以上塗り重ねて色漆の層（100 回で厚さ約 3mm）を作り、その層を彫り下げることによって文様を浮き彫りにする技法です。彫りそのものによる立体感と彫りの深さによって変わる色の対照が、独特の美を生み出します。室町時代に中国から日本に伝わり、彫りの技術に優れている玉楮象谷は、独自の彫漆技法を考案して作品を制作しました。

朱漆だけを塗り重ねたものを堆朱（ついしゅ）、黒漆だけを塗り重ねたものを堆黒（ついこく）といいます。いずれも彫漆の一種です。現在では、顔料の発達により、さまざまな色漆が使われています。



香川県 漆芸研究所

香川県漆芸研究所は、重要無形文化財保持者（人間国宝）らによる香川漆芸の後継者の育成、技術の向上はもとより、漆芸作品の常設展示や県民を対象とした漆芸体験教室の開催などを通じて香川漆芸の情報発信も行なっています。

香川県漆芸研究所は、香川県の三技法を保存し、後継者の育成と技術の向上を目的とする全国最初の施設として、1954（昭和 29）年 11 月設置されました。

当初は県内漆器産業従事者の技術向上を目指し、漆器業界の協力のもとに各職場の研究熱心な従業員が入所し、磯井如眞や香川宗石をはじめとする漆工芸作家から直接に漆芸技術の手ほどきを受けました。

その後、地域文化の一層の振興を図るために文化芸術に関する業務が知事部局の所管となったことに伴い、2009（平成 21）年 4 月に香川県文化会館に移転、新たな実習環境と運営体制のもとに、香川県の漆芸振興の拠点施設として再出発をしました。

2024（令和 6）年 11 月に創立 70 周年を迎えた香川県漆芸研究所の修了者（研究生）は 480 人を超えており、漆工芸作家や漆工技術者として活躍するなど、香川の伝統漆工芸や伝統産業の振興に寄与しています。

2013（平成 25）年には、山下義人主任講師（第 15 回研究生課程修了者）が当研究所修了者として初めて重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、また、2020（令和 2）年 10 月には、大谷早人主任講師（第 1 回研究員課程修了者）が重要無形文化財保持者に認定されました。

重要無形文化財保持者（人間国宝）による定例研究・技術講習会風景



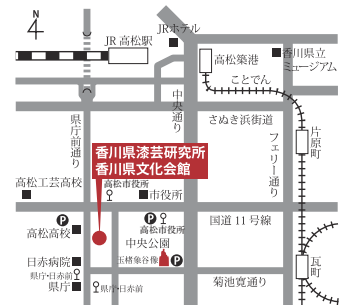
山下義人 主任講師



大谷早人 主任講師

香川県漆芸研究所

〒760-0017 香川県高松市番町一丁目10番39号
TEL：087-831-1814 FAX：087-831-1807
E-mail：shitsugei@pref.kagawa.lg.jp
<https://www.pref.kagawa.lg.jp/sitsugei/>



磯井如眞先生揮毫による館名板



山下義人
蒔醬時絵盆「落椿」



大谷早人
藍胎蒔醬網代編飾箱



石井馨堂
堆朱菊桐鳳凰文料紙文庫



磯井如眞
蒔醬喰龍遊禽之図



香川宗石
存清瑞鳥之図食籠



磯井正美
蒔醬存清林間飛翔箱



音丸耕堂
彫漆色紙宮昆虫譜



大谷早人
藍胎蒔醬菓子器「川瀬」



山下義人
蒔醬色紙箱「遙か」



玉楮象谷
堆朱二重彫鼓箱



磯井正美
蒔醬気球の旅合子



音丸耕堂
彫漆紫陽花香合



磯井如眞
彫漆蒔醬草花文鼓箱



太田傳
藍胎蒔醬八角食籠草花文



太田傳
藍胎蒔醬茶箱「春風」